ＰＴＡと生徒指導について　～ＰＴＡ活動の活性化～

群馬県立長野原高等学校ＰＴＡ会長　岩木　夏雄

本校は西吾妻の中核長野原町に位置し、東に吾妻渓谷、西に嬬恋高原、南に浅間山、北に草津白根山や野反湖と豊かな自然に囲まれ、恵まれた教育環境にある。昭和２７年、吾妻高等学校長野原分校として設立され、昭和４３年長野原高等学校として独立した。昭和４４年には建築科を設置し、普通科2学級･建築科1学級になり、平成１０年、普通科1学級減に伴い普通科に普通コース･観光コース、建築科に建築コース･デザインコースを導入した。平成１７年、建築科の募集停止、コース制を廃止し、普通科2学級となる。平成２０年、「ぐんまコミュニティー･ハイスクール」事業の県指定を受け、現在に至っている。全校の生徒数は１７９名である。

授業は国語･数学･英語を中心に、小規模校の特性を生かした少人数指導･習熟度別学習を展開している。また、3年間の個人ロードマップを設定し、2･3年生で生徒個々の目標に合わせた多様な科目選択を配置し、大学進学や種々の資格取得ができるよう工夫している。「ぐんまコミュニティー･ハイスクール」事業では、学校の人的資源や施設を有効活用し、地域の文化･スポーツの交流拠点等としての役割を担える可能性について研究し、小規模の高等学校の活性化に資することを目的として実施している。

ＰＴＡ組織は本部役員の他、通学地域を8支部に分け、各支部に地区役員として支部長･各専門委員を配置しており、各学年に学年部長･副部長を置いている。本校の生徒指導は、全職員の共通理解と統一した指導･ほめて育てる指導を心掛け、基本的生活習慣の育成（挨拶、遅刻早退防止）、中途退学の防止、頭髪服装の指導（ピアス、身だしなみ指導）、特に、服装では”公的な場”ではなおさせる指導を徹底している。そのためＰＴＡでは、ＰＴＡ総会において「生徒指導への全面的協力の決議文」を採択し、学校･家庭ばかりでなく地域を含めた包括的な問題として考え、三者が互いに連携し協力態勢を図ることで、家庭教育の充実や学校教育の理解･生徒の社会性の伸張や健全育成といったつながりを持たせたいと考えている。

全県下で実施する年3回のマナーアップ運動では、本部役員･ＰＴＡ支部校外指導委員に協力していただき、本校職員と一緒に各地区１３ヵ所で指導し、交通マナー･公衆道徳の向上･挨拶等の励行指導に取り組んでいる。校門では、幾分緊張気味で通過するが、挨拶を通して、保護者の柔和な表情を見てとり、安心感を持つ生徒も多いのではないかと思われる。生徒を指

導する場面はないが、自分の子供を含め、生徒の実態が理解できるといった評価をいただいている。また、「おはようございます。」「こんにちは。」と元気ある生徒の挨拶運動も確実に広まり、地域の方々から「長野原高校は変わったね。」と言われるまでになった。

さて、PTA活動の中で、生徒との直接的な触れ合いができるのが「花いっぱい運動」である。「花いっぱい運動」は全日本学校関係緑化コンクール学校林活動の部で準特選や群馬県環境教育優秀賞などを受賞している学校林共同作業に変わる新たな勤労体験学習として、親・生徒・教職員が一体となって、「生命を尊重し、いつくしむ心や態度を育てる」ことを目的に行っている。今年度で11年目を迎えた。主な内容としては、近隣の中之条高校から購入したサルビアと自生させたマリーゴールドの花苗の地植、プランターへの移植である。プランターは、本部役員・生徒・職員が一緒にJR長野原草津口駅・バス関東長野原支店・特別養護老人ホームからまつ荘へ寄贈している。参加した保護者は30余名で、配布用の軽トラックの用意もお願いした。また、今年度から2年間、県から「コミュニティー・ハイスクール」の指定を受け、「地域から信頼される学校づくり」を目指した教育実践の一環として、長野原町商工会を通して地元商店街にも希望をとり、多数寄贈させていただいた。以下は保護者の感想で、温かさや優しさが伝わり、この活動の持つ意味と大切さを痛感した。

作業開始。「時間内に終了するのかな」と思いましたが、始めればやはり高校生、手際も良く仕事をこなす姿には感動しました。 作業の片付けの終了際、プランターからこぼれた土を一人の男子生徒が、進んで片づける姿を見て、良い行いを見せていただき感謝いたします。身体は冷えて寒かったのですが、心が温まりました。

まだ、花は咲きませんが、植物も人間も似ているように思います。雨でも風でも育ちますが、手をかけすぎたり肥料を与えすぎると枯れたり、花が咲かない場合もあります。難しいものです。子育ても同じだと思います。いろいろな経験をして、楽しいことや辛いことも栄養にできる様に見守り、育んでいければと思います。

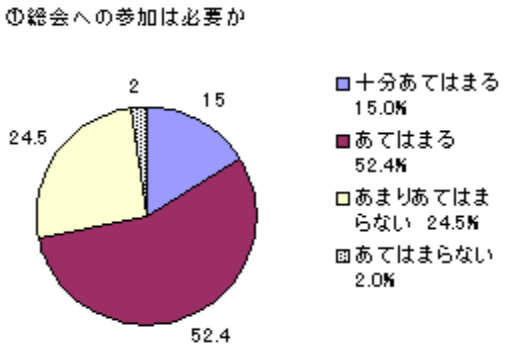
他にも、毎年10月に競技参観を兼ねて競技運営の補助(監察係)として、走路指導を行っている。走行距離は男子8km, 女子4kmである。生徒たちは、ところどころで保護者から声をかけてもらうことに、気恥ずかしさと同時に「頑張ろう」という勇気をもらっているに違いないと思うが、生徒たちの真剣さや学校の様子を伺うことのできる行事の一つとして、今後も継続していきたいと考えている。以下は保護者の感想である。

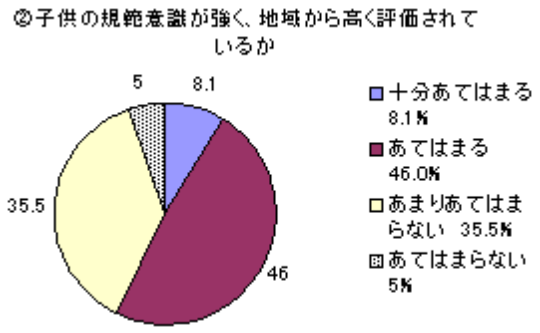
記録に挑む生徒の厳しい表情、真剣な面持ちで走っていく子供たちのひたむきさに感動し、自ずと応援に力が入る。やがて、通過する生徒たちの雰囲気が和やかなムードに変わり、友人同士語り合い、励まし合いながら楽しくゴールを目指す様子にもまた微笑ましさを感じました。

苦しく辛い行事の中にも、自ら一つの目標や楽しみを見いだすことにより、すばらしい思い出として蘇るでしょう。限りある高校生活の中で、そんな思い出を一つでも多く刻んでほしいと願っています。

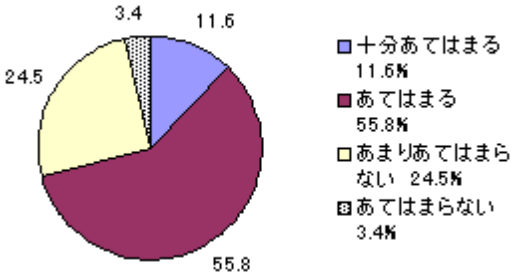
ところで、保護者の学校評価アンケートから、保護者の大部分は、機会があれば学校行事に参加したいとの意向を示していることがわかる。つまり、保護者が何を期待するのかを明確に分析し、学校に出向きやすい時期と有益な「機会」を設定する必要性があると思う。確かに、役員の学校での役割が多く、自己の仕事上無理な場面もあるが、役員同士の話し合いにより、どうにか一通りの行事をこなしているのが現状のようである。役員の皆様にはご協力に感謝しているが、「・・・させられている」という意識があると、学校側がどんな機会を作ろうとも水の泡となってしまう。ＰＴＡ役員や一般会員の態勢が学校側に依存するのは否めないが、現状を打破する方法として考えて頂きたいのは、会員の学校への「主体的な関わり」である。それは、明らかに学校を変える原動力になると考えている。「保護者参加型」「話し合う場」としての学校である。豊かな創造性を生み出すため、家庭・学校が有好な関係を持ち続けるためには、保護者同士の話し合いが不可欠ではないだろうか。

ここ数年の生徒の様子を見ると、言動が荒削りで無謀とも思えるような判断をする生徒は少なくなったように感じる。素直で誠実なのである。もちろん、問題点はあるものの家庭における良心的な教育は、ある程度子供に浸透していると思われ、生徒の行動にもそれが反映している。保護者が抱える問題、生徒が起こす問題、いずれも片側だけの指導では解決の糸口は見つからず、一方的な指導には限界があり、問題の背景を明らかにすることはできない。そのためには、家庭と学校が補い合いながら、共通認識のもとに建設的な方向に事が進むよう配慮することである。

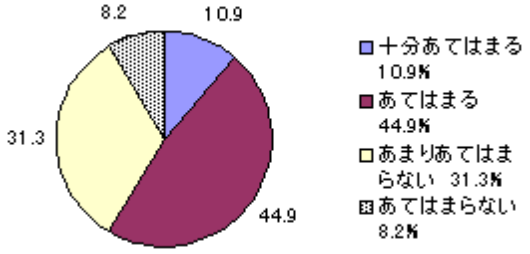




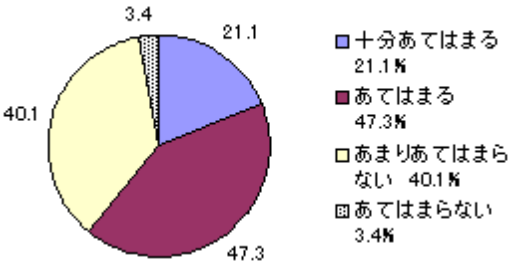
③子供は地域からの評価を意識しているか



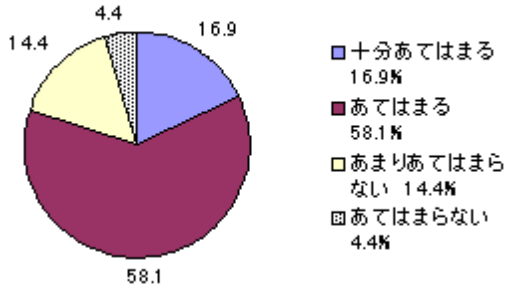
④部活動を通して礼儀・規範意識・忍耐力が身についたか



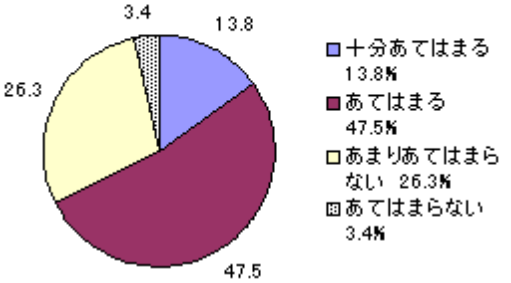
⑤服装・校則が守られているか



⑥挨拶・言葉遣いができているか



⑦無遅刻・無欠席を達成できるようにサポートしているか



ＰＴＡ活動を通して、目の当たりにした感動の場面や改善すべき事柄等を学校に報告したり、家庭での話題にしたりすることで、物事を子供と同じ目線で考えることになり、共通認識として意思の疎通が図れるように思われる。

ＰＴＡと生徒指導の関わりは、自分の子供とその周りにいる生徒たちを、偏見な眼差しでなく、等身大の彼らをありのままに受け入れるところから始まるのではないだろうか。そのためには、学校のＰＴＡ活動に向けた環境を設定することが必要だが、保護者がＰＴＡ活動や学校行事等のさまざまな機会に足を運び、地域から必用とされる高校の実現に向けて、学校を側面から支援していくことだと思う。

子供たちの可能性を信じて、保護者･地域･教職員で子供たちの健全育成に力を合わせていきたいと考えている。